

旅の概要

(20161007～20170528)

大村伸一

いつものテーブルに着席すると、ほぼテーブルと同じ寸法の白いノートを広げ、それから黒か青のボールペンを持ち書き始める。本当は書き始められない。二色のボールペンがあると便利だが、その場合は黒にするか青にするかを迷うのでやはり書き始められない。いずれにせよ、毎日、この席でノートを開くたびに、そこに何を書けばいいのか何も思いつかない。何をかけばいいのか迷うというよりは、何も書くことがみつからないので選ぶこともできない。ともすれば、何一つ書きたくないという気持ちにすらなる。書こうと思っているのだけれど、心のどこかで言葉を選ぶことをためらっている、そんな気がする。などということを考えているうちに、考え続けているからこそ、ノートにはまだどんな言葉も書いていない。ただ白いページを見つめているだけだ。見つめてもいない。毎日、新しいページを開き、見開きの二ページには何も書かれていない空白のページが二ページ、それを目の前にして、何も書き始めることができない。たぶんその二ページというのも想像しているだけなのだろう。本当はノートなど存在しないのだろう。何も書いていない。どんな言葉も書いていない。

この時間、店はいつも満員で、店員から死角になっているこの席で、注文を取りにこないのいいことに、毎日この時間この席で何かを書くために居座っている。それは毎日ずいぶん長い時間になるが、注文を取りに来ないのと同じ長さだけ私は書くことのできない文字を頭の中で試していて何も書いていないのでその長い時間を何かを書くために費やしているというのは正確ではないだろう。おそらく、頭の中ではたくさんの言葉を書いていて、書いては消して書いては消してを繰り返しているから、それでかえってこのノートの上には何も残らないということだ。いや、頭の中でも何も書いてはいないのだから、書いていないし消してもいないということも繰り返しているというほうが正確だと思う。

まだノートには一つも文章が書かれていないが、その空白のページをちらりと覗き込んでから向かい側の席に座った男の顔はよく知っていてしかも名前は知らない。毎日顔をあわせていても何一つ言葉を交わすこともなく、故に勿論お互いの名前など知らないという関係は、このような店ではよくあることだろう。よくあることであるにもかかわらず、どちらかが話しかけ親しくなるというような機会が生まれないのは奇妙なことだ。よくあるのなら、お互いの名前を知らせ合うような様々な機会があってもよさそうなものではないか。よくあることが奇妙なことであるということは、よくあるからといってありふれたことではないということなのかもしれない。この発見はノートに書いたほうがいいだろうか。ノートに書く価値はあるのだろうか。それにしても、これはありふれたことなのかありふれたことではないのかどちらなのだろうかと考えている間にも、ノートには一文字も書きつけることはできていない。おそらく考えるということと書くということは相反する行為なのだ。考えている限り何もノートに書かれることはないのだろう。このような法則もノートに書いておいたほうがいいのかもかもしれない。

それから、男はいつものように新聞を広げて読み始めた。とはいえ、たぶん読んでいるふりをしているだけなのだろうと思う。読んでいる新聞は逆さまではないが、いつも同じ日付の新聞だ

ということはずいぶん前から気づいている。その新聞の記事は当然毎日の事件が毎日のそれぞれの記事が印刷されているにも関わらず、予算のせいなのか編集長の方針なのかあるいは校正係が視力を失っているのに誰も気づいていないためなのか、偶然に、どのページにも日が変わっているのに毎日同じ日付が印刷されているということはまさかないだろうし、だとすれば、男は同じ新聞を何度も読み返しているわけであり、同じ新聞を何度も読み返すことほど退屈なことはないだろう。もしかすると、新聞はそのように読んでいように見せかけてはいるが、読んでいわけではないのかもしれない。いや、夢中になって読んでいようというほうがその男の様子に忠実だから夢中になって読んでいようということのほうが事実なのではないか。

そう考えていて気づいたのだが、あるいは、この町には新聞に印刷できるような日付がないという可能性だってなくはないだろう。市の条例や町の特産物として、日付が変えられなくなってしまったとか、日付が誘拐されてしまい取り戻す当てもなくもはや誰にも変えることができなくなっているとか。そういう事件が昔はあったし今でもあるとどこかで聞いたように思う。だとすれば、新聞の日付が変わらないことなど取るに足りないことだと言えるだろう。それとも、私が日付だと思っているそれが何か特別な意味を持った記号にすぎないということもありえない。

まだノートには一つも文字が書かれていない。それを確かめるようにノートの紙面すれすれに顔を近づけてから隣の席に座ったのはいつものもう一人の男だ。とはいえ男だということに確信があるわけではない。たぶん、服装からそう思っているのだろう。だぶだぶの黒い上着にゆるめの黒のズボン。もしも女だと言われればそうだと思っていたはずだ。頬はすべすべして帽子で隠された髪はおそらく長いはずであり、なんとも気持ちのよくなる香りをさせているのは男か女かの証拠にはならないのだろうか。誰かと話をしているのを聞いたことはないが、きっと美しい声なのだと思う。その人は自分のペンを取り出すと、何も書かれていない私のノートの中央に、ふたたび顔が紙面に接触するほど体を乗り出して何かを書きつけている。そんなに顔を近づけるのは目が悪いかからかもしれない。なにかの拍子に涙をノートにこぼさないだろうかと不安になるほどだ。涙ならまだしも涎をこぼされたらその頁は破り捨てなくてはならないだろう。その裏に重要な何か書かれていたとしても、それでも涎でページがくっついてしまった以上、その紙はもはや破り捨てるしかあるまい。くっついてしまったページは二度とひらけないだろうし、もしもそうになったらどうすればいいのだろうか。もしも張り付いたページの内側に私の書いた文章があったとすれば、その文章は二度と私の目にさえもとまらなくなってしまうだろう。とはいえ実際にはそこに書かれているのはその人の文字であり、私の文章はまだ書かれておらず、ペンはまだそこにたどり着いていないので、そのあたりに何が書かれているのかを私は知らない。

その人がそれほどためらいもなく書き続けられるのであれば、このノートは私のものではなく、この人のものなのではないかとすら思う。それならばなぜ、私がこうしてノートを前に座っているのに咎めることさえしないのだろうか。もちろん、私がまだ何も書き始めていないからだろう。書いていない文字のことで私を咎めるなど不躰にもほどがある。私はまだノートに何も書いていない。ノートは私のものではないのかもしれない。

「相席いいですか」

おそらくこの店に初めて来たのだろう見たこともない客がそうたずねた。若くものおじするところがないので最近この町に来たのだとわかる。

「どうぞ」

と言うと、他の二人も軽くうなづいた。その見知らぬ客は礼を言いながら椅子を引いて腰掛けた。それから、自分がとても空腹であり、それというのもついさっきの列車でこの町についたところなのだが、長距離を走るその列車には食堂車もなければ車内サービスもないといういたら

くだったのだと、誰にともなく話し続けた。ノートの半分より上(あるいは下というべきなのかもしれない)には私の文章ではない文字が書き連ねられ続けていて、そこに何が書かれているのか気がきではなかったが、私はまだ一文字も文章を書き始められずノートの上半分が書き尽くされたときにどうすればいいのかということが気がかりで何か書かずにはいられないのに、相変わらず何も書き始められない。

「いくら待っても注文を取りにきたりはしません」

ふと思いついてノートの一行目はこんな文章を書くことにした。十分に明晰でありなおかつ曖昧であるこの文章は、自分ではなかなかいい出だしだと思うが、誰も興味を持つことなどない言葉であることもまた明白だった。

「この店の食事は何かお勧めでしょうか」

得意の一行目には何の反応もみせず、旅行者はそう尋ねた。新聞を読んで顔をあげない男や、大きなノートの真ん中にペンを走らせるのに夢中になっているあの人には何も期待できそうもないから、このただ一人ノートを前に動くこともできないようできて何かを書こうとしているとも見えなくもないこいつだけは信用してもいいのかもしれないという態度だ。信用してもいいというよりは、相手にしてもいいだろうという態度と言うべきだろう。とはいえそんな中途半端な感情が芽生えようとしているなどありえないことは考えてみるまでもなくわかるだろう。どうして私に尋ねるのだろうか。

店の中を見回せば、椅子に座ったまま床に倒れ、乾いたサラダを口からあふれさせ、それはおそらくレタスだがそのレタスの食物繊維を生のままもがきながら床に撒き散らしていたり、自分の口よりも何倍も大きな肉の塊をどうやって口に入れたのかもわからないのに喉につまらせ、外れた顎が肉を口から取り出すことも咳き込むこともできないまま床をのたうちまわっている客が何人もいる。この床をころげまわっている十二人が皆、食べられない料理をわざわざ自分の家から持ち込んできたわけではないだろう。ノートにはこのように書き加えたが、そう書くと、旅行者はそんなことは認められないとでもいうように唸り、あたりを駆け回っているウェイトレスに手を大きく振ってみせた。

「この席は店のものからは見えない場所にあるのです」

その手を軽く押さえるとともに、このように注意しなくてはならなかった。

「もしも食事がしたいのなら、他の席に移ることをおすすめします」

ノートにはこのように書き加えたが、旅行者は意外にも文字が読めないらしく少しも腕を振るのを止めようとしなかった。どこか遠くからやってきたのだろうか。確か列車に乗って来たと言っていたが、言葉も通じないほど遠くの土地から鉄道はここまで繋がっているのだろうか。とはいえそれならば、確かにノートにどんなことを書こうと気にしたりはしないだろう。読んでいてそのうえで無視しているのであれ言葉を知らずそのために意味が分からないのであれ、諦めずに手を振り続ける旅行者の合図に店の者はなんの反応も示さない。旅行者が手を伸ばせば届きそうな距離に誰一人近づかないのは、合図に気づいていないというわけでもなさそうだ。店の主人からこのテーブル席は相手にしないようにと指示されているのだろう。

「このままでは餓死してしまいます」

うかつなことを言うべきではないと注意すればよかったのかもしれない。あとになってからこの文章こそノートに今書くべき言葉だったと気づいたが、そのときはもっといい言葉を思いついたと思いついていたのでそうは書かなかった。旅行者は食事を求めている。きっと空腹だったからだ。

出口では、無愛想な店員が軽やかに精算機のキーを叩いて支払額を伝えた。キーの奏でるメロディは短調なのだがそれと同時に虚ろに陽気で、どんな金額を言われても笑いながらその二倍の金を払うことになるだろう。その曲はどこかで昔聞いたことがあるような気がした。どこでだったのかは思い出せなかった。おそらくその店のその精算機で一日前に聞いた同じ曲だったのだろう。そういえば、この店にきた最初の頃、何一つ注文していないのだから支払いはできないと文句をつけたりもしたが、そういう問題ではないのですとレジ係は言った。座席料というわけかねと意地悪く言ってもみたが、それは意味が通じなかったようだった。隣のテーブルで何か飲み物を一杯だけ注文していた女性が、床に届きそうなほどの長さのレシートを受け取り、うれしそうに支払っていたのを見て、それでようやくどの客も誰か他の客の代金を払う仕組みになっているのだと気がついた。一旦、仕組みが理解できれば、これほど合理的なシステムはないのだと分かる。金儲けだけが目的ではなく真にお客を喜ばせるために考え出された仕組みなのだとわかる。支払いと引き換えに渡してくれるレシートには、誰か他の客の飲み食いした記録が残されている。それは誰にとっても期待に体が震えざるを得ない体験ではないだろうか。たとえば、紅茶とクッキーなどという組み合わせのレシートを渡された場合には、いつもみかけるあの若く美しく身なりのすっきりとした女性の代金だと想像がつくが、自分の部屋に戻ってからそのレシートを見ながら、彼女が紅茶とクッキーを摂取している様子を思い出しくッキーに触れる指先の温かみや紅茶の熱さを感じ無意識に動く喉のひくつき、その味と熱量が体内にしみわたりやがて彼女の脳に達して彼女に抗いがたい喜びを与える瞬間、それらすべてを想像すれば、うしろめたくさえある興奮を覚えるものだ。いつか彼女は紅茶とクッキーだけでなく、唇を脂で光らせ口を動かすたびに肉汁が床に飛び散るような生のステーキを食べるだろうか。もちろん食べるはずだ。だからこそ今その様子が目に見えるだろう。あるいはその様子を見ることはできないにしても、その支払いを私にさせて欲しい。そのレシートを自分のものにしたいという切ない思いも抱くだろう。勿論、彼女を食事に誘うだけなら誰にでもできる。しかしそのレシートを、その支払いを自分のものにすることは本来であればただ運命に願うしかないのだ。どうか彼女の飲食の支払いを我に。彼女の支払いを永遠に我が身に。そんな欲望に満たされながらたった一人の部屋でレシートに向かって頂点に達するのである。そういう仕組みなのだ。

勿論、そんな支払いが巡ってくる幸運はそうそう誰にでもあるわけではなく、大抵は乾いて味の蒸発したサラダであるとか喉に詰まらせるしかない巨大な硬いステーキの代金なのであり、だとすればああやって店の床の上で命を落とした客たちの代金を間抜けな客から巻き上げているというのが真相なのかもしれない。いろいろな理由があるのだろう。いろいろな理由があるのに違いない。

この店がこれほど賑わっているのは、この仕組みのおかげなのだと思う。このテーブルで一緒になる他の二人も例外であるはずはない。新聞の男のレシートは赤色で、幸運のレシートを引き当てたと大喜びだ。私のノートに何か知らない言葉を書き続けていた人物はレシートを見もせずポケットに入れたが、あれもよほどの当たりをひいたのだろう。誰にも見せたくないというわけだ。ただ、旅行者は勿論初めての体験で、レジ係に甲高い声で文句を言いたてていた。店長は来るだろうか。レジ係は優秀だから店長の姿をみかけたことは一度もない。だとすれば、旅行者がいくら抵抗しても結局は払うことになるのであり、その結末を見ることなく私は店を離れた。

勿論、私は乾燥して硬くなったステーキのレシートだったので、店を出るなり手のひらの中で小さく丸めて捨ててしまった。店は大通りに面していて店を出てくる客を見つけると目つきの悪い若者がわざわざ服の前をはだけてから近寄ってくる。若者の胸のあたりから何か機械油の匂いがするのは、脅しをかけているのだろう。それほど価値のあるレシートだったのだろうか。三歩道

を戻り、道端に捨てた紙くずをもう一度拾い、皺を伸ばして確認していると、若者は意外とていねいな口調で話しかけて着た。

「肉は硬くなかったですか」

「熱い紅茶にまさるものはありませんね」

「となりの客がくさいと食事の価値も半減します」

結局は何を食べたのかを執拗に尋ねているだけなのだから、私は何も答えず顔を腕で隠しながら通りを渡った。何も食べたり飲んだりしていないなどと言おうものなら、彼らの態度は一変するだろうし、そのあとどういう目に合わされるのかはひとつも文章が書けないくらい想像力がなくてもわかった。

それにもかかわらず、病院のベッドの上で気がついた。何があったのかは覚えていなかった。まさかこのベッドが我が家ということはないだろう。それでも消毒薬のにおいに懐かしさを感じるから、ここが私の住処なのかもしれない。このベッドの上で生まれベッドのまわりで踊りながら育ったのだろうか。まだ何も思い出せない。薄い緑色の制服を着た女が顔を覗き込んでいた。頭に服と同じ色の小さな帽子を被っていたので、病院の職員だということは明らかだった。これがわたしの母なのかもしれない。私が目覚めたことを確かめると、彼女はすぐに部屋から出て行った。医者を呼びに行ったのだろう。母は医者をやんだ。

医者は聴診器を手のひらで包み込み十分に温めてから胸に触れたのだけれど、それでもそれはひんやりとしていた。気づかれないように表情は変えなかったのに、医者はすぐにその装置を胸から離してポケットに隠した。聴診器を握りつぶすほどの力は加えていなかったが見ていて分かるほどに唇を噛んでいたのはやはり悔しかったのにちがいない。もう二度とその聴診器は使わないのだろう。でもそれも確かなことではない。

「何か心配なことはありますか」

わたしのこめかみに指をあてて脈を測っていた医者は五七七まで数えると、それ以上数えることを諦めてそうたずねた。医者は脈が止まるのを待っていたのかもしれないと思ったのでそう言ったが、それは心配なことではなくただの疑問ですねと言って、もう一度心配なことはあるかと聞いた。改めて少し考えてみたが何も思い浮かばなかったのでそう言うと、医者はポケットから何かを取り出し、嬉しそうに口調で話しながらそれを渡してくれた。

「生きている限り、むしろ心配なことしかないはずですが、今は仕方ありません。これから先、何か心配なことを思いついたらこのチケットを使ってください。無料で回答するでしょう」

医者がチケットと読んでいるものは、どう見ても何かの紙をちぎった切れ端で、裏返すと角のあたりに小さく「天使」と印刷されていたのは、なにかいかかわしい店の広告だったのかもしれない。表には大きめに「一」と数字が書かれていて、駅前や街角でよく医者が配っているものと同じようにその文字は医者の手書きだった。一ということはあるはこのチケットがこの医者の最初のチケットだったのだろうか。だとすれば無くさないようにしなくてはならないだろう。

とはいえ誰が回答するのかは言わなかった。この医者が自分で答えるはめになる機会を嬉しがっているとは思えなかった。患者と話をするのがいやなのか、私と話をするのがいやなのか、どちらかだと思うが医者は診察の間ほとんど聞き取れない声で話していた。だとすると、こんなに笑顔なのは自分以外の誰かに余計な仕事をさせることが嬉しいのだろうか。そうかもしれないしそうでないかもしれない。誰が回答するのか、この紙切れからはわからない。医者はそんな質問をされることが嫌だったのだろう、紙切れを渡すと急用が持ち上がったとでもいうようにそそくさ

と椅子から立ち上がり、診察室の反対側の扉から出て行ってしまった。つまり、診察が終わったということだろう。

それほど待たされることもなく薄緑色の制服を着て同じ色の帽子を被った看護師が病室に帰りましようと言って、入って来た扉から外に出るように促した。扉から外に出て振り返るとガラス扉の内側の診察室には霜が降りていて、机の上のカルテの文字が凍りつき読めなくなっていた。凍ってはいないのかもしれないが、そこに何が書かれたのかは分からない。おそらく医者以外の誰にも分からない文字というものがあるのだろう。医者にもわかっているのかどうかもはっきりとしてはしない。カルテを管理しているのはこの看護師ではない別の看護師なのにちがいない。カルテに積もる霜をすこしも気にする様子はなく、そのまま私を診察室から追い立てたからだ。扉が閉じるとき、それともカルテには何の価値もないのかもしれないと思った。

診察室を出るとそこは病院の裏口で、灰色の細い枝の木ばかりが生えている林に面していた。病室はこちらですと言う看護師に案内され歩き始めたが、そこは林の中に続く灰色の道だった。病室は思ったよりも遠くにあったようだった。それから自分の病室にたどり着くまでに三日かかったのでそう思った。時計はないから正確ではないかもしれないが、おそらく三日だと思う。半日だったにしては空腹がひどかったし、一週間もかかっていたらもっとサンダルが壊れていてもおかしくない。おおよそ三日で間違いはないはずだ。そうしてたびれきって病室に着いた時、あわててベッドを整える付き添いの看護師からは嗅いだことのない花のかおりがしていた。三日間一緒に旅をしていたが花はどこにも咲いていなかったし、見舞いの花をもらうあてもありはしない。だとすれば、そのかおりは看護師が生まれつきかおらせていたものなのだろう。そして、ようやく制服の色が薄い桃色に変わっていたことに気づいた。

病室に戻るまでの三日の間に、何度か図書館の通路を通ったような気がしている。通路はあかりが灯っていなかったので、ほんとうにそこが図書館だったのか、ほんとうにそんな場所を通り過ぎたのかは確信がないけれど、その三日間の記憶といえばほとんどこの図書館のことばかりだった。同行の看護師は本が好きだったのだろうか。図書館の通路は通ったが本棚も本も一度として見なかったのだから、あるいは同行の看護師は本が嫌いだったのかもしれない。もしも本が嫌いだったのなら、図書館を通ったことを尋ねられるのは気に入らないはずだから、看護師にそのことを確かめたりはしなかった。それに、病室まで同行した看護師と、この病室の世話をしている看護師が同じ人物であるかどうか、服の色が変わってしまった今となっては、確かなことはわからない。

病室での毎日は退屈ではなかった。ベッドの上に座り込んで、ノートを開くと、そこには相変わらず何も書かれていない。以前、どこかのページに何かを書いたような気がするのだが、そんな言葉や文字はどこにもなかった。自分の書いた文字がないとしても、誰かが熱心にこのノートに何かを書き続けてはいなかっただろうか。そんな気がしてならないのに、幾度確かめても、どのページも真っ白だった。誰かが一度何かを書いたのなら、その痕跡が残っているはずだから、このノートは以前使っていたあのノートとは違うノートだということになるのだろうか。ノートを誰かがすり替えたのかもしれない。そんなことができる人物はそんなに多くはいない。そして、心当たりもないではない。

「きれいなノートですね」

食器を片付けるたびにベッドの上に広げるノートを見て、看護師は幾度もそう言った。ただの真っ白なノートをきれいだというのが奇妙だと思ったのは最初の頃だけだ。おそらく、ノートが真っ白であることを私が喜ぶように誘導していたのだろう。だとするとやはりこの看護師がノートをすり替えたのだろうか。これだけではそう断定することはできないだろう。それとも看護師はあのきれいなノートが欲しかったのだろうか。それならノートを盗んだということも考えられ

なくはない。だが、新しい真っ白なノートとすり替えるよりも、その新しいノートを自分のものにしてしまうほうが、そんな看護師の望みは叶うはずだ。それに、ノートが盗まれたというのであれば、あの気を失っていたあのとき、あのときには誰であれノートをすり替える時間はいくらでもあった。あの妙に丁寧な話かたをするあの不良少年が盗んだと言ってもあながち的外れではないはずだ。それならあの医者でさえもそんなことをしなかったとは言えないだろう。とはいえ、すり替えずに持ち去っていたとしても、物事はそれほど変わらないのだし、同じノートをどこかで手にいれる手間をかけるほどの意味があったとも思えない。だとすれば、このノートにはいままで誰も何も書いたことなどなかったノートだというしかない。

図書館で一冊も本を見なかったということなどありえない話だと思う。図書館というものはおそらく人に本を見せ読ませるための施設なのだから、一冊も目にすることなく図書館の中を通り抜けることなどできるはずがない。通路ばかりをうろついていたと思い込んでいたが、一日の大半を大きな書棚のある部屋のいくつも並んだ机のひとつに座って、何かを読んでいたような気がする。三日でこの病室にたどり着いたと思っていたが、図書館ではもっと長い時間を過ごしてきたのではなかったか。そんなに長い時間、何を読んでいたのだろうか。それは思い出せそうで思い出せない。確か看護師が熱心に勧めるので、図形と数字の書かれた本を手にとったはずだ。文字ばかりだとすぐに退屈になるでしょうと言われたことは思い出す。図形は挿絵でなく数字はパズルではなかったので、退屈はしなかったがそこに何が書かれているのかは結局わからなかった。図書館の机は冷たく、開いたページの間からこぼれ落ちた文字は机の表面に当たると次々と凍りつきたちまち砕けた。もしも暖かい季節に行ったのなら、図書館は文字の湖になっていただろう。

図書館では見たことのない本をたくさん読むことになった。朝になると看護師は絵本を探してくると言って姿をみせなくなり、看護師がいなくなるとそれを待っていたかのようにすぐ子供のような背格好の女性が近づいてきて、何か探しているのかと尋ねた。顔つきも子供のように見えたから、おそらく子供図書館に隠れていたのかもしれない。水色の作業服を着ていたが、工事をするわけではないことは想像がついた。図書館では工事は行われぬ。工事ほど本に悪い影響を及ぼすものはないからだ。胸の名札に「司書」と大きく書かれていたので彼女は司書だった。

どう答えればいいのかわからずにしばらく彼女の顔を見つめていたら、目をそらしたのは彼女だった。彼女には何か秘密があったからだろう。化粧をしてはいないようだったがそれは司書だからだろうか、それとも子供だったからだろうか。そして、名札に「司書」と書いているのは司書には名前がないからなのだろうか。それとも「司書」というのが名前なのだろうか。

「司書がどういう仕事で誰が司書であるのかを知りたいと思います」

その答を聞くと、彼女は少し頬を赤くして口ごもりながら、それならこの辞典を読むとよいでしょうと言い「大司書大辞典」という大きな本を貸してくれた。貸出カードに何も書かなかったのは、あとで書くつもりだったのか、それとも貸したことを秘密にしたかったのだろうか。礼を言って大辞典を机の上に置き、さっそく取り掛かったが、結局最後まで読み終える前に図書館を出発しなくてはならなかったような気がする。大辞典の最後のページに何が書かれていたのかをすこしも覚えていないのはそういうことだろう。読んでいたという証拠になるだろう、大辞典の最初の言葉は正確に覚えている。

「図書館とは、言葉の倉庫であり、求められたものごとに応じた言葉を見つけ出し与えることができます」

だから、何も望みを持たない者は図書館では何も得られないということだ。あの子供のような体つきの司書にはあの日から二度と会っていない。今考えると、それはとても当たり前のように思える。

図書館ではたくさんの本を読んだが「大司書大辞典」を読んでおけば他の本など読む必要はなかったのだと今ではそう思う。この大辞典にはすべての言葉が書かれているとか、あらゆる本のあらすじが書かれているとか、そういうおとぎ話ではなく、大司書大辞典を読めば世界中のどこに何が書かれているのかがわかってしまうということだ。おそらくあの辞典に書かれているすべてを理解し記憶すれば、間違いなく大司書になっていただろう。その場合、おそらく世界に図書館など必要がなくなるのだと思う。そのとき世界はそれ自体が図書館となるからだ。そうすると司書というものは存在しなくなるはずだが、途中までしか読めなかったのだから、読み終える前に図書館を出発してしまったので、司書がなくなるのかどうかは確かめられない。勿論、私は大司書ではない。では、あの大司書大辞典を貸してくれた少女のような体つきの司書が大司書だったのかと尋ねられれば、そんなこともないように思う。名札には「大司書」ではなく「司書」としか書かれていなかった。

何か奇妙な感じがするのは、たぶん、看護師が何も話さなくなったからだろう。真っ白いノートが綺麗だとも言わなくなったし、何を話しかけても返事をしない。何か機嫌を損ねるようなことをしたのだろうか。食事を残すとかシーツに染みを残すとか、そういう類の不始末はしてしまったかもしれない。だがそれは看護師の仕事なのだから、機嫌が悪くなる理由ではないはずだ。言葉を交わさなくなると制服の色合いが濃い青色に変わった。毎日雨が続き、うなだれた木の葉が窓に張り付いて外はもう見えなくなってしまった。あとになってあれは誰かの工作だったのだと気づいた。そんなことをする者についても心当たりがある。気づいたことがあればすぐに知らせるようにと、誰かが言っていたような気がする。これは知らせなくてはならない事柄だろう。他に何を知らせるといふのだ。それで手紙を書くことにした。他にどういう手段があるだろうか。この病室には電話もなければ無線機もない。ただ、紙だけは望むだけ手に入るのだから、それに手紙を書いて送るしかないというわけだ。

図書館での私の仕事はもっぱら手紙を書くことだった。看護師だったか司書だったのかどちらが言ったのかは忘れたが、毎日少なくとも一通の手紙を書くようにと言われた。そう言った人は、誰に宛てて書いても良いから自由に書けばよいと指示したけれど、すぐにその手紙が誰に届くのかは分からないとも付け加えた。そうだとすれば命じたのは手紙係だったのだろう。他にそんなに手紙に詳しいものなどいるはずがない。そういう経緯があって、最初の手紙はこう書き始めた。

はじめてお便りいたします。わたくしの体重は67。表面積は263です。

体重や表面積をきちんと測定したわけではなかったし、これらの数字は素数であるということ以外には意味がなくだとすればこの文章には何の意味もありはしないと言われ、書き終える前にその手紙は手紙係が破り捨てたように思う。確かに単位もない数字には何の意味もない。そのときは気づかなかつたが、このこともあって誰に宛てて書くかということがとても重要だということに気づいたのは三日目の夕方だった。その頃には手紙はこう書き始めるようになっていた。

はじめまして。わたしが紙書無書です。この名前、いたって特徴のない何度読んでもすぐに忘れてしまうような名前でしょう。もちろんそれは偽名だからです。警戒しないでください。偽名を使うからといってこの手紙は脅迫状だとか告発だとか、そういう類のものではないのです。私には偽名を使わなくてはならない理由があります。

きつと届いた相手が誰であれ、こんな書き出しなら興味をもって読んでもらえるはずだった。この文面で何通も手紙は書いたが、返事をもらったことは一度もなかった。手紙に返事を待っていると書けばよかったのだろうか。しかし、それは不躰のような気がしたので、そう書きはしなかった。見知らぬ誰かからきた手紙で返事を強要されることは楽しいできごとではないだろう。勿論、手紙をもらったことなどなかったので、それは誤った想像だったのかもしれない。幾つ目かの手紙では、ふと思いついてパレードのことを書いた。

残念ながら私はまだ見たことがないのですが、このごろは誰に聞いてもパレードの話で持ちきりです。パレードはもうすぐあなたの町にもやってくるのでしょうか。それとももう通り過ぎてしまったのでしょうか。

なにしろ思いつきだったので、実際にパレードの話など聞いたことはなかった。つまり誰もパレードのことを話したりしてはいなかった。この手紙を読んでも、あの手紙係は破り捨てることもなく送り届けてくれた。ちゃんと届けたと言われたが、もしも私の町にもパレードが来たという返事が届いたら、私はそれ以上手紙を書き続けられなかっただろう。

パレードがはじまるという話を聞いて、屋上で見ることにした。看護師だったか司書だったかあるいは手紙係だったのか、屋上にいきますかと誘うとうなづいた。パレードは誰であれ見たくなるものなのだろう。彼女はひとつも汚れのないマスクをしていたので、本当のところ彼女が誰なのかは分からなかった。パレードのために新しいマスクをおろしたのだろうか。洗濯ではあれほどきれいにはできないだろう。不自然な皺などひとつもなかった。それでも子供のような体つきだったからあの司書だったかもしれない。いや、白衣を着ていたから看護師が感染を警戒してマスクをつけていただけなのかもしれない。手紙を運ぶための小さなカバンを腰にぶらさげていたのではなかっただろうか。あるいは白衣もマスクもカバンでさえ私を欺くための変装だったということもないではない。それなら彼女はあの旅行者だったのだろうか。

階段はいつものようにゆっくりと螺旋になっていたが、階段を登ったからといって目がまわるようなこともなかった。とはいえ足を踏み外さないように手すりをずっと触っていたので、手すりが本の背表紙でできていることには気づいた。本というものはずいぶん頑丈に作られているものだに関心したことを思い出す。まだ大司書大辞典の存在も知らなかった頃なので、ずいぶんとたわいのないことに関心していたものだ。疲れたような彼女に手を差し出すと彼女はすこしためらってから握り返してくれた。その手が温かかったか冷たかったのかは覚えていない。乾燥していたのか湿っていたのかもはっきりしない。階段は思いのほか長く、屋上に近づくにつれて次第に段も高くなり、屋上の扉が見える頃には、身長よりも高い段差を超えるのに二人で力を合わせなくてはならなかった。一人で屋上に向かっていたら、途中で引き返さなくてはならなかっただろう。

図書館の屋上に上るとはるか下の国道では、地面が見えないくらいに人だかりができて、パレードがもうすぐそこまできているのだとわかった。大勢の人がパレードを待っていた。パレードの来る方向、遠くの方でたくさんの風船が空に放たれ、その風船の集まりは急に成長するひとつの大きな生き物のようにみえた。とはいえ、風船には原理上二十二色しかない。二十三色目の色は誰にも作れないのと同じように、二十一色に減らすことも不可能だ。遠すぎる風船の色は混ざり合い灰色の生き物にしか見えなかったが、よく見れば二十二色の生き物になっているはずだった。汽笛のような音も聞こえてきた。近くに港があるのだろう。太鼓やラッパの音もやがて聞こえ出した。楽団もパレードに加わったということだ。パレードが近づいてくると大通りが次第に

広くなり、人々は通りのあちら側とこちら側に分かれはじめ道路の銀色の舗装も見え出した。向かい側の建物が少しずつ小さくなっていく。待っていた人たちもみんな誰が誰なのか分からなくなっていった。もとより、見知った人などいなかったのだけれど、国道が広がりそれでかえって、パレードの接近が分かるという仕組みになっているのだろう。その仕組みを閲覧室に帰ったら調べてみようと思いつきながら、あれから今まで結局調べてはいない。調べようと思いつきながら調べなかったことはこれ以外にもたくさんあり、何を調べようと思ったのかそのほとんどは忘れてしまった。

パレードの先頭は誰にも気づかれないという決まりになっていた。パレードが始まったことがあらかじめ誰かに知られたら、パレード自体が台無しになってしまうだろう。パレードはふと気がつく目の前にいて、見物人はそれだけでひどく驚くはずだ。その驚きこそがパレードというものではないだろうか。確かに花火はあがっていたが、花火の輝きや爆発音は、昼間だったから気づかないほどで、すでに印象にも残っていない。そんなものがパレードであるはずはない。そんなパレードはなかったのだろう。

書棚にはそこに並んでいる本を示す記号が書かれた小さな紙片がどこかに貼り付けてあり、書棚ごとにそこに収められている本のはじめの一冊の記号と終わりの一冊の記号が示されていた。今でも覚えている記号はいくつもあるが、それを表す文字がここにはないので書くことはできない。「機械の持つ尿意」について書かれた本から「脊椎というものが幻想にすぎない」と主張する哲学書までを収めた本棚を特によく覚えている。

ある朝、見たことのある男が息をはずませ頬を赤らめながら近づいてきたときは、図書館の館長なのだろうと思った。私に触れられない距離は私がとびかかっても十分に避けられる距離でもあるのだが、その距離で立ち止まると笑顔をうかべ、体調はどうかというような質問をしたので、これが医師であることに思い至った。

それから毎朝、その同じ書棚の前で診察を受けた。簡易診察だと医師は言っていた。おそらくそれでその書棚のことを特別に覚えているのだと思う。そこには「完全臨床技法の崩壊」という本や「分別のない病理学の完成」などという本が並んでいて、医師は問診の間に疑問が生まれると、目の前のそのような本を手にとって調べることができた。

何度目かの朝、三つ向こうの書棚のあたりからもわかるような笑顔を浮かべて近づいて来た医師は、いつもの位置で立ち止まるとこう言った。

「あなたの病気ができました」

そのような言葉遣いは聞いたことがなかったので話を続けるのを待っていた。

「それまではあなたをどのような病気だと診断すればいいのか確信が持てなかったのですが、今朝届いた論文には正確にあなたを特徴付ける病気が論じられていました。これでようやく病気ができたということです。あまりにも論文に書かれた症状があなたの場合と同じなので、もしかするとあなたを診察していたのは私ではなく、この論文の著者だったのではないのかとさえ思いました。しばらく考えてから、他にもないこの私がこの論文を書いたのではないのか、という疑問を抱いたほどです。おそらくその推察は正しいはずで、というのもこれらの仮説は何一つ矛盾せず、そこから推論されることは、おそらく私がこの論文を書き、机の上に放置し、それを忘れたあとに、再び私に見出されたということなのでしょう。

あなたはまぎれもなく病気であると診断できました。いやもちろん、あなたがウイルスやバクテリアであるということを言っているわけではありません。あなたの存在それ自体に内在する本性であるところの病気が定義されたということです。病気は完全性の欠如の証明であり、それは

つまりあなたという存在がまさにここに存在するということの証明でもあります。おめでとうございます。あなたの病気が定義されると同時に、あなたの存在が証明されたということです。

さあ、あなたは治療を望みますか？

そのあとも医師は何かを話しつつけたが、それは書棚の目の前にある「攻略穴漏らし族の印象」の七十二頁の言葉そのものではなかったのだろうか。

診察の後は決まって、閲覧者用に用意された区画の広い机の上に「大司書大辞典」を広げた。白く磨かれた机の表面はちょうどぴったりの寸法の「大司書大辞典」の下に隠れすこしも見えなから、机などないかのようだ。そして、その机の隣の机には私がたどり着く前から同じような寸法の大きなノートが広げられていて、その机にやってくる者には一度も会ったことがない。あれは誰のノートだったのだろう。「大司書大辞典」を学びながら、その白いノートのことが気になってしかたがなかった。それというのも、その正確には白ではないが灰色とも言えないその紙の表面の色や隣の机からさえ分かるその紙のやわらかさ、おそらくすばやくインクを吸い込みながらも裏に漏れることの決してないその紙の材質を伺わせる光沢、そういったいろいろな事柄から、そのノートが私のノートであると思えなかったからだ。指で触ってみれば即座に明らかになっただろう。ペンがあれば何か新しい言葉を書き加えることさえできそうに思えた。しかし、そんなときに限ってペンを貸してくれそうな誰かに会うこともなかった。

よく考えてみればあれは列車だった。どうして図書館だったなどという勘違いができたものだろうか。病室はとても遠かったので、帰るためには列車に乗るしかなかないと言われた。閲覧室だと思っていたのはあれは客車だった。まったく揺れていなかったから気づかなかっただけで、窓があれば列車であることは間違いようがなかったはずだ。揺れていなかったのは長距離列車だったからだ。世界の果てに行く列車なら、どれだけ速度をあげてもまるで動いていないように感じるものだと、誰かに聞いたことがある。世界の果てはよほど遠くにあるのだろう。そんなところに行ったなら、帰ってくるなどできないはずだ。揺れていようと止まっていようとそれとは関係のない話だ。そんな列車に乗るにはよほどの覚悟が必要だから誰もが乗るというわけにはいかないだろう。あれは作り話だったのかもしれない。

それから、屋上に出たと思っていたけれど、勿論、列車に屋上などありはしない。あれはきっと展望車両だったのだろう。それに、パレードがどんなものだったか一つも覚えてないのも、屋上などない列車に乗っていたことの証拠といえるだろう。

列車ではいくら待っても車掌や車内係が回ってくることはなかった。よほど多くの車両が連結されていたのだと思う。食堂車もなかったが、すぐに病室に到着するからと看護師がなだめるので我慢するしかなかった。看護師の口の端に何か果物の茎のようなものが垂れ下がっていたことに、その頃の私は少しも気づいていなかった。列車は途中の駅をすべて通り過ぎた。それで少しも動いていることが分からなかったのだと思う。病室が世界の果てにあるわけではなく、予定通り三日目には列車は病室に到着した。

こうして思い返してみても気がついたが、あれは図書館でもなければ長距離列車でもなく機械工場だったということはないだろうか。おそらく、機械工場の近くに図書館があったのでそれを思い違えたのだろう。決まった時間になると甲高いサイレンがしばらく続き、工場の機械を止める時刻と起動させる時刻を知らせていた。機械に休憩は必要ないが、工員は交代で休憩をとることになっていて、そんなときは駐車場で体を伸ばした。工場の駐車場は幾つかの区画に分けられ、工員が工場に入るために車を停める区画、工場から出て行くために車を停める区画、工員の

ための娯楽用区画があった。区画の間の違いは外から見ていてもすぐにわかったはずだ。娯楽用の区画では、いつも玉乗りや太刀使いがいて、不安定な玉の上で大きな太刀を空中に投げ上げてそれを口で受け取る芸を見せていたし、時には猛獣使いにあやつられた、トラックよりも大きな獣が音も立てずに走り回り、吐く息の熱さで駐車場に描かれた区画ごとの番号を示す記号を溶かして見せていた。日によっては見たこともない楽器を吹いたり叩いたりして賑やかな音をかなで、空一面に花火を打ち上げることもあった。どうもそれをパレードと勘違いしていたのだろう。

工場の建物と隣り合っている区画にはトラックの出入りする区画があった。そこに停められたトラックの荷物の積み下ろしの様子も外から見えた。積み込むのは毎回違っていて例えば異国風の植物の絵が描かれた凧であるとか人気力士の姿が描かれたワッペンなどは遠くからでも分かった。降ろすのはいつも決まって小さな毛の塊だった。何か小さな生き物のようにも見えたが、剥いだ毛だけを丸めたものかもしれない。遠くからではどんな生き物の毛なのかはわからなかった。工場に運び込まれる間すこしも動かなかったから、おそらく生きてはいなかっただろう。作り物だったかもしれないが、そんなものを工場に運び入れる理由はないような気がした。

図書館で「大辞典」を読んでいたのとちょうど同じ時間に工場で機械を操作するボタンを押していたと思う。朝一番に渡される「操作順序案内」に従ってボタンを押すように言われていたが、正しい順番でボタンを押すには念入りな集中が必要で、工場では騒音のためそのような集中は不可能だから、必ず何度も押し間違えるのだった。誰でもそうだと班長は言ったが、班長の唇は自分で噛んで渗んだ血が乾いた瘡蓋になっていたのだから、それは本心ではなかったのだろう。一日の作業が終わる頃には手首が痛くなっていた。手首だけではなく全身が痛かったけれど、もっとも痛みを感じたのは手首だった。指先はもう痛みも感じなかった。夜は痺れた指を口に咥えながら眠った。大辞典の頁を繰るときに指に写った文字は、夜の中に唾液でやわらかくなり指から剥がれて舌の上に溶けていった。口の中を確かめるたびに医者は順調だと評価していた。大辞典の文字はあるいはそのインクは体にいい成分からできているのだと、医者は手元の本を読み上げて教えてくれた。工場での仕事は病気の療養のためだとも言われていたが、病気がよくなったような気はしなかった。もともと、何か具合の悪いところなどなかったのだから、よくなりようもなかったのだと思う。しかし、そう言っても誰もそんな話にはとりあわなかった。付き添いの看護師は、私からその話を初めて聞いた時、悲しそうにうなづいただけだった。だからそんなことは二度と看護時には言わなかった。工場で作ったものが何だったのかを毎朝、医師に報告した。虹彩から逃げ出た虫を透明な石に閉じ込めたバッジであるとか、昂った感情チーズの缶詰であるとか、

「と考えているところですね」

班長が私の作業機の向かい側に立っていて、そう話を続けた。その五分ほど前に、

「ひとつゲームをしましょうか」

と医師は言った。言ったのは班長だったかもしれない。それは質問ではなかった。医師または班長はこう続けた。

「私がああなたの言葉を予測し話します。あなたの考えた言葉が、私の予想した言葉と違っていたら教えてください。ゲームはそこで終了です」

それから、私が何か話すたびに、

「と考えているところですね」

と付け加えた。私が告白している内容が、語り終えるやいなや医師の予測に変わってしまうのだということに、その頃の私はまったく気づきはしなかった。あるいは班長であれば、それが私の査定になっていたのかもしれない。

図書館で使われている言葉は私の知っている言葉とは違うので、何を見せられてもその意味がわからなかったのだと思う。図書館でなく列車であるとしても、工場であるとしても、私には意味がわかってはいなかった。列車で使われている言葉や工場で使われている言葉も、私の知っている言葉ではなかったのだろう。そう言うと、医師は言葉には意味などないのだから、わからなくてあたりまえですと言ってなぐさめてくれた。その言葉の意味が私にはわからなかった。

ときどき、レストランのことを思い出して、医師に尋ねた。

「何も飲み食いしない我々はあの店にとって何者なのでしょう。なぜ、追い出されなかったのでしょうか」

そう尋ねると医者はうなづいてからこう答えた。

「金を払うものが支配しているのか、金を払わせるほうが支配しているのか。という質問ですね。それは昔からある議論です。しかし、そんなことは考えるまでもありません」

医者が店の味方をしていることはこれでわかったが、勿論、一度でもあの店で他人の代金を払ったことがある者ならば、その考えがごく当たり前の考えだと同意しただろう。

看護師が手紙が届いたと言って私に手紙を届けてくれたのは、図書館で暮らし始めた最初の日の夕方ではなかっただろうか。工場の仕事が終わりに、部屋に戻る途中の廊下だっただろうか。医師の診察が終わり、昼食をとったあとだっただろうか。手紙はありふれた灰色の封筒に入っていて、差出人の名前は書かれていなかった。封を破った跡はなかったから、看護師に聞けば誰からの手紙なのかは分かったのかもしれない。宛名の文字は見覚えのある筆跡だったが、手紙をもらったことなど一度もなかったもので、それが誰の筆跡なのかは思い出せなかった。

はじめまして。わたしが紙書無書です。この名前、いたって特徴のない何度読んでもすぐに忘れてしまうような名前でしょう。もちろんそれは偽名だからです。警戒しないでください。偽名を使うからといってこの手紙は脅迫状とかいやがらせだとか、そういう類のものではないのです。私には偽名を使わなくてはならない理由があります。

最初に空白が一文字入っていなかったかもしれないが、見ただけでは空白のことはわからない。脅迫状といわれても私には脅されることなどなにもなかったし、私にいやがらせをしたい人物など想像がつかなかったもので、この手紙は間違っただけで届けられたものに違いなかった。看護師が間違えたのか、もともとの差出人が間違えたのか、あるいはその間の担当の誰かが間違えたのだろう。

工場での楽しみはもっぱらサーカスでした。月に一度、工場の駐車場にサーカスがやってくるので、みんながそれを楽しみにしていました。夜は大勢が見物にでかけます。工場で働く者だけでなく、近くに住む人たちも集まるので、駐車場は人でいっぱいになりました。気の早い者や子供達は昼間から駐車場にやってきて、サーカスの準備やリハーサルの様子、たまには、まだ訓練中の団員が練習をする様子を見物しました。それは無料です。人を集めるのによい広告になるからでしょう。サーカスが連れてくる動物の声は朝から聞こえます。夜中にも聞こえます。昼間はずっと聞こえます。声をだす動物もいますが、だまされたままの動物もいます。大きな牙のある肉食猛獣はたいてい眠っていますますが、近づくと食べられてしまうという警告の看板から先には誰も近づきません。それでも生臭く腐りかけたような肉のにおいに見物人たちは獣の獰猛さを感じて興奮

するのです。サーカスに割り当てられた駐車スペースのちょうど猛獣と反対側には草食動物が集められています。草食動物の糞においては少しでも嗅ぐと気持ちが鬱ぎ、泥道の上であれ崖の上であれ、体を丸めて眠りこみそのまま死んでしまいたくなるものです。ジャングルでは捕食動物はこのにおいを嗅ぐだけで気が狂ってしまうのだらうなと思いました。無表情な馬はたくさんいましたが、一日中その顔を見ていても少しも区別できませんでした。飼育している人によれば、耳と鼻を通る空気の立てる音や尻の穴の硬さ、蹄の裏側にある模様などで区別するのだそうです。いつも涙を流している工場の建物よりも大きな動物に近づきすぎた見物人の幾人かは涙に溺れて死んだのだという噂もありました。丸くてどこが頭なのかも分からず、どこから餌を食べどこから息をしているのかも分からない生き物もありました。脚らしいものもなく尻尾もみあたらなかったの、あるいはあれはただの毛玉だったのかもしれませんが。たくさんいた草食動物にはにおいが気にならなければ近づいてもよいのですが、餌をやることは禁じられていました。

サーカスが占有している駐車場の近くには図書館がありました。誰もそこから動物図鑑を借りてきてこれらの動物が何であるのかを確かめようとはしませんでしたから、動物の名前はまだまだにわかりません。図鑑で調べてしまうとその動物は消えてしまうのだと信じられていたのです。名前が知られるとその動物はあとかたもなく消え去り、そんな動物がいたことさえ忘れられてしまうからです。図書館には、そうして失われたものについての図鑑があるのだとも言われていました。いかにもありそうな噂話ではありますが、どう考えても辻褄が合いませんから、誰も本気にはしませんでした。きっと動物図鑑などというものもなかったのかもしれませんが。

そもそも、図書館だと言われなければ図書館だとは気づかなかっただらう。どこにも本棚は見当たらなかったし、本どころか辞書さえみつからない。そんな図書館があるはずはない。それで、あれを図書館だなどと思わなかったのだらう。だからといって消毒薬の瓶もついぞみかけなかったし、機械の歯車の擦れる音も聞こえなかった。遠くで弦楽隊のマーチが聞こえていたような気もするが、それほど確かな記憶ではない。だから、誰かがここは図書館だと説明してくれたから、それでそこを図書館だと思い込んでいたのだらう。話してくれたのが医師であったか班長であったかそれとも司書であったかは忘れてしまった。

受け取った手紙には必ず返事を書いた。その中には受け取らなかった手紙への返事も混じっていたはずだが、いずれにしる誰に届くのかは決まっていないのだから、同じことではないだらうか。返事を書かなかった手紙は捨てずにとっておいた。そういう手紙をいれる箱を看護師に用意してもらったのだから確かな話だ。金属製の軽い箱だった。ヘルマニウムという名前の金属ではなかっただらうか。たぶん違うと思う。そんな金属などありはしない。そんな箱があるのかどうかもあやしいところだ。用意してくれたのはマスクで顔を隠していたあの司書だったかもしれない。一度読んだ手紙は二度と読まなかったから、部屋や廊下の隅にあった紙捨て箱に捨てた。捨てるのは自分ではなく誰かに頼んでいたようにも思う。返事を書く前に捨ててしまった手紙に返事を書くことは難しい。もしも書いたとしても、元の手紙がもうないのだからそれは返事だと言えるだらうか。一度、貰わなかった手紙を捨てようと思うと伝えようとしたら、それはだめですと言われ、手の甲を叩かれた。あのとき初めて手と手が触れ合ったのだと思う。看護師だったか司書だったのかは思い出せないが、班長ではなかったように思う。機械の音がしてはいなかったからだ。班長と話をするときはずっと歯車が半周回転するごとに金属のこすれあう音が聞こえていた。班長の作業服には機械油の染みがついていて、それはいつも同じ場所についていたので機械の汚れは洗濯ではとれないのだなと思っていた。染みだと思っていたがあれは歯車を形どった

ワッペンだったのかもしれない。班長は手紙のことなど知らなかっただろう。もしも知っていたら私が工場の秘密を漏らすつもりなのではないかと疑われたに違いない。

隣の机に広げられていた白いノートは大司書大辞典だったのではないだろうか。自分で開いたはずの大司書大辞典に書かれていたことを一つも思い出せないのはそこに何も書かれていなかったからであり、だとしたら、隣の机に広げられていたあの白いノートとの間に何も違いなどありはしない。ならばあのノートこそ大司書大辞典だったということだ。私は知らない間にいつも大司書大辞典を持ち歩いていたのだろうか。ちょうど私の机を挟んでノートと反対側の机には、ときどき見知らぬ者が座った。彼らはいつも大きな旅行鞆を足元に置いて、机の上にはどこかの地図を広げていた。とても細かい地図だったので、詳細は読み取れなかったが、隣の席から見るとかえって全体の様子分かるものだ。とはいえ地理の素養はなかったから、それはもう誰も覚えていない失われた動物の顔にしか見えなかった。失われた動物の顔を見たことはないが、それが失われた動物の顔であることは、一目見れば分かるものだ。そう考えていたのだがあるとき、それは動物の顔などではなく、図書館の大司書だとマスクをした司書が教えてくれた。大司書に会ったことがあるのかと聞くと、何も答えなかった。また別のあるときに、看護師はもっとはっきりと、それは院長の肖像画だと教えてくれた。院長に会ったことがあるのかと尋ねると、看護師もまた何も答えずに隣の部屋にいつてしまった。こういったことを考え合わせると、あの地図は、地図と思いつ込んでいたものは、案外、工場長の似顔絵だったのではないだろうか。そのことを班長に尋ねようと思っていたが、いつからか班長と会うことがなくなってしまったので、確かめることはできていない。

存在しない動物の似顔絵が地図ならば、そんな地図のそんな場所もまたとくに存在しないのに違いなく、そのような地図を研究しているということから察するに、彼らは旅行者だったのだろう。もっとも、旅行鞆を肌身離さず持ち歩いているのだから、どんな地図を読んでいようと旅行者であることは明白だったし、だとすれば地図を開いていなくても旅行者であることは分かっていたはずだ。隣の机を使っているからといって、話をしたことは一度もなかった。旅行者だったのならば、彼らの旅の興味深い話が聞けたのではないだろうかと思う。だがそれはもしも話が上手だったらの話だ。旅行者であっても話のつまらない人はいる。彼らはまだ語るに足りる旅行をしたことがないのだろう。それとも自らの旅を秘密にしたいのかもしれない。

彼らと言っても、隣の席の旅行者はいつも同じ旅行者だった。消滅した動物やいもしない人物の自画像にしかみえない地図はいつも同じ地図だったし、足元に置かれている旅行鞆にはいつも同じ名札がついていたのだから、同じ旅行者だということをはじめから分かっていた。もしも、旅行者と呼ばれる者が大勢存在したとしても、この図書館のような場所に訪れる旅行者がそうそういるわけではない。一度も話をしたことはなかったし、挨拶すらしなかった。その旅行者はそれほど地図の研究に打ち込んでいたのだろう。わざわざこの地図を研究するために、とても遠くの町からやって来たのであり、この地図に没頭する時間は非常に貴重なのだから、決して私との会話で時間を無駄にさせないでくださいという言葉が足元の旅行鞆につけられた札に書いてあった。旅行鞆は机の下からはみ出すほど大きく、それほどの荷物を携えて旅をするからには、特に遠距離の列車に乗ってやってきたのは間違いない。

今から考えると、そんなに長い期間図書館で地図を研究し続けていたのだから、彼女は単なる旅行者ではなく旅行学者だったのではないかと思う。旅行学者の存在は大司書大辞典の最初の方で説明されていて、それがどのような説明だったのかは記憶していないけれど、とても印象的だったので覚えている。旅行学者はパレードの前に訪れパレードの後に帰ってゆく。パレードはまだ一度も図書館まで来てはいない。

サーカスの猛獣だったか、それともパレードの猛獣だったか、あるいは工場で飼育していた猛獣だったのか、いずれにせよ逃げ出した猛獣が図書館の廊下を我が物顔に歩き回り、廊下の壁一面に逃えられている書棚からその牙で何百冊もの本をひきずりだし、食い荒らしたという事件や、今まさに食い荒らしているという警告が大司書大辞典に何度も書かれていた。それが歴史なのか警告なのかそれとも予言なのかは分からない。ただ、間違いなく今も猛獣が喉を鳴らし熱い息を隠そうともせずに私の背後に近づいてくる。

図書館で本を探している人をみかけたことは一度もなかった。本を探す人々が顔を合わせないですむような仕組みが図書館にはあったのだろう。それとも、もう誰も本など探そうとしていなかったのかもしれない。というのも、どの本を開いても、どの頁を開いても、そこには同じ言葉が書かれていたからであり、そんな本を読みたいと思う者などどこにもいはしない。図書館の司書にそう言うと、そんなばかなことはありようがないと笑われた。もしもそんなことがあるとしたら、図書館などという施設は必要がないのだし、私などは失業ですなとも笑いながら言った。図書館で読んだただ一冊の本である大司書大辞典にはそれまでもそれからも読んだことのない言葉がたくさん書かれていたように思う。確かに、最初はたくさんの言葉が書かれているように見えるのだが、その頁のその文字をよく見つめていけば、やがてそこには同じ言葉しか書かれていないことが分かるのだから、つまり同じ言葉であっても読むたびに違うように読み取れるのでそれが同じ言葉だとは誰も気づかなかったのだろう。読み終えられた言葉は消えてしまうのだと主張する人たちもいるが、もしもそうなら図書館にある本はどんどん白紙のノートに変わってしまうはずだし、第一、本の題名というものが真っ先に消えてしまうはずだから、誰もその本を二度とみつけだせなくなる。だとすれば、読んだあともその本があることを確かめようはないのだから、読み終えられた言葉が消えてしまうという説もあながちありえない話ではないだろう。だとすれば、本から文字が消えないようにするため、誰にも読まれないように鍵をかけた秘密の部屋の中に本は隠されているのかもしれない。確かに、大司書大辞典にはそんなことも書かれていたが、誰がそのような話を信じるというのだろうか。

私のノートは誰かによって書き換えられている。ご存知のように、私はずっとこの大判のノートにどんな文章も書けないでいるのだから、こうして私の考えが記されているこれは私のノートではないということだ。ノートではないのか、ノートだが私のものではないのか、そのどちらでもよいということだ。そして、この私のものではないノートかノートではないものに書かれているのは、私の思ったことであるとも言えるし、そうでないとも言える。それはもはや私とは何の関係もないことばであり、此処に至るまで、なぜそんな言葉を私自身の思ったことでもあるかのように錯覚していたのだろうか。私は一度もこれがわたしの考えであるなどとは申し述べていないので、錯覚したのは私ではない。もしもどこかでこれが私の考えであると書かれているならば、それはすぐに明らかになるだろう。ともかくはっきりとしていることは、はっきりとしていることがすぐにはっきりとしないことであるかのように書かれているということだ。私とは何の関係もないことばかりだから、はっきりしていることが正しいのか、はっきりしていないことのほうが正しいのかは、私には分からない。何か重要そうなことが書かれているとしても、すぐにそんなことは忘れられてしまうだろう。忘れるのは私なのかもしれないが、私ではない誰かかもしれない。では、重要なことなど書かなければいいのだが、わざと重要なことを書きながらもそれが重要ではないと思わせようとしているのかもしれない。そもそも重要なことなど何かあるのだろうか。そんなことは何一つないと思う。

工場にはいろいろな種類の機械があり、私は印刷機械と製本機械をよく担当した。製本機械は完全に自動化されていて、同じように印刷機械も誰かが操作する必要はなかった。班長の指示で私のすることは、朝、仕事が始まる鐘の鳴る前に機械の電源を入れることと一日の終わりの鐘が鳴ったらすぐに電源を止めることだった。それ以外の時間は、なにをしてもいいが、工場から外に出てはいけないと班長に指示されていた。駐車場は工場の中だったので、駐車場のサーカスをよく見に行った。サーカスには町中の人が見物に来ていたが、近くにある図書館や病院で働く人たちはすぐに顔見知りになった。たまに訪れる旅行者は大きな鞆を引きずりながら見物していたのですぐに気づいた。工場に住んでいるカラスが、サーカスの飼育している猛獣の糞をねらって近づいていったが、猛獣は気にもしていないようで、カラスは好きなだけ糞に群がることができた。そんなこともあって、サーカスのある間、太りすぎたカラスはあまり高く飛び立てない。食べ過ぎじゃないのかと声をかけると、食べられるときに食べなければ生きていないのと同じことだというようなことをカラスは言った。カラスは工場からきちんと食餌をもらっているのだから、命に関わるほど飢えているはずはないのだが、カラスは貪欲な生き物だと思った。だとすれば、私のノートの見知らぬ文字はカラスのくちばしでひっかかれたものかもしれない。そんな文字はどこにもなく、私のノートは空白のままだ。

私が本を食い散らかしたというのか。草食動物ではあるまいし、本など少しも食いたいとは思わない。しかし、あれだ。あの文字というやつは食べずにいられなくなる。俺を見て震える様などはいたく食欲をそそる。口の中に震える文字からこぼれだす汁を感じる。本は食わないが文字なら食ったことがある。たいして腹はふくれませんが、食べずにいられない。

床の下からいつも重い何かをころがすような音がしていた。巨大な歯車が地下で回転しているのだろう。はじめは気になってなかなか寝付けずようやく眠れてもその音で目が覚めたこともあったが、いつのまにか慣れてしまった。工場の機械を動かすためには膨大な動力が必要だということだ。この歯車がなければ工場は何も生み出さない。そして、この工場がなければ歯車は存在しない。歯車は存在せず、そんな音などしてはいなかったと言われればそうだったのだと思うだろう。工場で働く者の半数が歯車でできていたので、地下にはそんなに大きな音をたてる歯車は必要なかったはずだ。歯車といっても回転する必要さえないのだから、歯車は停止していたのかもしれない。だとすればやはり音などするはずがなかった。確かに歯車などなかったといわれればそうだったのだと思う。あれは工場の歯車ではなく、列車の動力機関だと幾度も教えられた。車掌やサービス係にあの音の正体を尋ねれば、決まってそう教えてくれたものだ。確かに、普通の列車にはそんな歯車がないわけではないが、高速で運行する列車に重い歯車を使うことはなく、世界の果てに向かう列車が最初に取り外す部品だということだ。そう言われれば、あれほど低く重くいつもうなり続ける音は、線路と列車の車輪とが摩擦する音でなくてはならない。摩擦で発生する音は歯車のきしみとよく似ているし、なかなか区別がつかないものだ。確かに、あれは列車を永遠に前進させるための力を生み出す動力機関の立てる音以外にありようははずがない。病室に戻るためだけに列車を動かしているわけではないのだからと、車掌やサービス係は何度でも同じ説明をしてくれた。

だがパレードの先頭を切る呼び込みの小さな人の意見は違っていた。床の下で繰り返される重い何かを転がすような音というのは、パレードが町にやってくる時の、猛獣を乗せた馬車の車輪の音以外にあるものかと、すこしバカにしたように唾を飛ばしながら言った。確かに猛獣だけでなく草食動物も運ぶとなれば、その音の違いを聞き分けるのは難しいだろう。だからこそ、パレー

ドの先頭やパレードがしばらく留まる間、近隣の町をめぐる俺がそれを知らせているのではないかと、薄ら笑いを浮かべながらそうも言った。

確かにそうではあるけれど、司書はポケットに手を突っ込んだまま言う。そんなにめずらしい音を記録しているのは図書館以外にはありえないでしょう。記録は正しく記録されていることを確認するために、夜になるたびに再生されるのだから、夜間にそのような音がしても、ここは図書館なのだからすこしも不思議はないのですよ。そう言ったのは確かだが、彼女は私の話をさも聞いてなどいないかのように振り向かず、近くの書棚の陰にしゃがみこんで姿を隠したから、そんな記録などなかったのだろう。

ある朝、ことの経緯を話すとそれは雑音性不眠症だと医師は診断し睡眠薬を処方してくれた。収束性不眠症だと言われたのかもしれない。ずいぶんあとになって、不眠過剰性不眠症候群と診断されたのかもしれないと思いついたが、そんなに複雑な名前ではなかったと思う。処方箋は二日で無効になるのに、図書館に薬局はなかったのだから、いつも睡眠薬は手に入らなかった。使えなかった処方箋はどうしたのだろうか。部屋の隅にあった紙くず箱に捨てたと思うが、封筒に入れて残していたかもしれない。何かの役に立つのではないかと思っていたからだ。封筒に入れていたのは確かだから、間違えて誰かに送られてしまっていたのだろう。処方箋の期限が切れているので薬は渡せないという意味の手紙が届いたからだ。そういうつもりではないと返事を書くべきだったのだろうか。そんな手紙は来たことがないのだから、返事は書かなくてよかったはずだ。処方箋を手紙で送ることは禁止されていて、うかつに返事を出せば投獄されていたかもしれない。図書館に牢獄はなかったからそんな心配は不要だと思っていた。でも、工場には留置場があったと思う。列車にはそのような車両があったかもしれない。そのような日々、私はなかなか眠れずにいた。何かが不安だったからか、何も不安がなかったからか、その間もずっと真っ白いノートのページを前に何も書けずにいた。

確かに私はノートには何も書けませんでした。だとすれば、そんな私が手紙を書いたということなど考えられません。私は手紙を書いたことがないのでしょ。看護師が座らなくてもすむ机に覆いかぶさるようにして手紙を書いていた姿は何度もみました。私のかわりに彼女が手紙を書いていたからです。私からの手紙に薬品の名前が書かれていたら、おそらくそうなのだと思います。もしも、その薬品の名前が詳しく正確だったら、書いたのはあの図書館の司書なのでしょう。彼女が手紙を書いている姿を見たことはありませんが、そもそも図書館であの司書の姿を見たことは一度しかなかったのですからそれもしかたのないことです。それに司書であれば、大司書大辞典を参照して、いくらでも詳しく正確な手紙が書けますから、届いた手紙がどんなことについても詳細にかつ正確に書かれていれば、その手紙を書いたのは、差出人が私であるとしても、司書が書いたことに間違いはありません。彼女が花火を見ようと屋上に上がったとき、それは口実だったのだと思います。屋上でならいくらでも長い手紙が書けるからです。手紙を書くために屋上に行ったということでしょう。もしも、私からの手紙が郵便受けに入らないほど長かったならば、それを書いたのはあの司書でしょう。あるいは、司書に部下がいたとすれば、その部下の司書補が書いたのかもしれない。勿論、それ以外に誰が書くというのでしょうか。昼過ぎの図書館で、幾人もの司書補が机を並べて手紙を書いている姿を見たことがあります。そんなばかげた話はないと思うでしょう。そうです。手紙を書く者は順番が決まっています、一通の手紙を交代しながら書くことになっています。いつも誰かが手紙を書いていたのですが、それに気づくほど図書館に足を運んでいただけではありません。とはいえ、誰も郵便受けに入らないほど分厚い手紙を受け取ることはできないので、長い手紙もそれを運ぶ手紙係などどこにもいはいませんでした。おそらく、パレードの団長が旅先で手紙を書いていたのでしょう。次の町に向かってパレードが出発したと

き、私のかわりに手紙を書くと約束していたからです。便箋から獣の糞のにおいがしていたり、猛獣の体毛が挟まっていたら、そうなのだとわかります。だとすれば、団長はサーカスで飼育していた猛獣や草食動物に手紙を書かせていたのでしょう。サーカスで飼われている獣であれば、手紙を書く真似くらいはできるからです。サーカスの練習を減らしてでも、手紙を書いてくれたのでしょう。サーカスでの事故が増えていると聞いたことがあります。それが原因ではないとはいえませんが。それでも、サーカスが遠くの国まで行ったときには、その手紙を届けたのは長距離列車の車掌か、もっとありそうな話ですが、おそらく運転手でしょう。彼らは預かった手紙を盗み読み、おもしろがって書き加えたり書き直したりするのです。私から届いた手紙は列車の乗組員が書いたものかもしれません。高速で走る列車の中ではどんな物も熱をおび、先端に焦げ目が残ります。手紙の縁が焦げていたらそれは彼らが書いたものです。手紙が燃えていたのなら一緒に運ばれた手紙に火が移り、手紙を運んできた者は丸焼けになるのですから、燃え上がる列車の絵を描いた画家はそれを見ていたのでしょう。少なくともその画家が私からの手紙を書いていたわけではないことは確かです。